世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『一日だけのシンデレラ』

第 25 話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場人物　（第二十五話「一日だけのシンデレラ」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モリー

ジェームス

デュファルジュ

市長夫人

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メル（ネズミ）

1

ミンチン女学院・屋根の上（朝）

次々に天窓に舞い降りて啼く雀たち――

2

同・屋根裏部屋（朝）

粗末な机に――ローソクの燃え尽きた燭台と、開かれたままのデュファルジュのくれたフランス語の教科書。その上に、突っ伏して眠っているセーラ、雀の声に、はっと眼をさます。

セーラ「いけない！……昨夜、フランス語の勉強をしながら、眠ってしまったんだわ」

その時、隣室の壁にノックの音――

3

同・ベッキーの部屋（朝）

ベッドに起きたベッキーが、ノックする。

ベッキー「お嬢様、お起きになる時間でございます……お嬢様…」

4 同・屋根裏部屋（朝）

5 同・台所

モウモウたる湯気——の中で、働いているジェームス、モリー、セーラ、ベッキーたち。

6 同・地下の食堂

ミンチンが、席についた女生徒たちを見廻して、

ミンチン「そういう訳で、今日は、市長夫人はじめ、市の偉い方方が、皆さんの勉強振りを見学に見えるのです……こ

の学院の生徒として、恥しくないよう、日頃の成果をお見せせねばなりません……判りましたね、ラビニアさん」

ラビニア「はい、院長先生……」

自信たっぷりに微笑で応える――

7

同・表

使用人階段を、重い水バケツを抱えて昇って来るセーラと、続いて来るモリー。

モリー「いいかい、今日は偉いお客が沢山来るそうだから、しっかり掃除するんだよ」

セーラ「はい、モリーさん……」

モリー、地下へ戻って行く。

セーラ、ふっと吐息したが、玄関の石畳を洗いはじ

める——

× × ×

その時、一方から本を小脇に抱えて、デュファルジュが登校して来る。

× × ×

はっと気がつくセーラ——

セーラ「あ、お早うございます、デュファルジュ先生」

デュファルジュ「やあ、ボンジュール・マドモワゼル・セーラ……朝早くから、御苦労さんだね」

セーラ「（微笑）いえ……もう、大分なれましたから」

デュファルジュ「（微笑）偉いな、それは……所で、フランス語の勉強は、進んでいるかね」

セーラ「はい、先生に頂いた教科書でずっと……」

デュファルジュ「ほう、それはよかった……」

セーラ「ほんとうに有難うございました」

デュファルジュ「いや、勉強の好きな君に、私の出来るせめてもの応援じゃよ……きっと今に、神さまも君に応援して下さるじゃろうて……では」

微笑で片眼をつぶってみせると、玄関ドアへ入って行く——

微笑で見送るセーラ——

鳴り出す振鈴の音——

8 同・一階廊下

アメリアが、振鈴を鳴らして通る——

9 同・教室

席について、お喋りしている女生徒たち。

ドアが開き、教科書を抱えたデュファルジュが入って来る――

デュファルジュ「ボン・ジュール・マドモワゼル……」

女生徒たち「ボン・ジュール・ムシュウ・デュファルジュ……」

10　同・表

仕事を終り、バケツを持つセーラ――

×　×　×

教室の窓から、デュファルジュと女生徒たちのフランス語の声が聞えて来る。

デュファルジュの声「Il fait beau,nest-ce pas ?（イルフェ ボゥ ネス パ）」

女生徒たちの声「Il fait beau,nest-ce pas ?」

×　×　×

微笑で窓を見上げたセーラ、小さく答える――

セーラ「ええ、今日は、とても良いお天気ですわ、デュファルジュ先生……（フランス語で繰返す）」Oui,Il fait beau temps.

×　×　×

その時、郵便配達夫がやって来る。

配達夫「お早う……郵便だよ」

セーラ「あ、ご苦労さんです」

セーラ、封筒を受け取る。

郵便配達夫、戻って行く。

セーラ、封筒の宛名を確かめる。

セーラ「院長先生にだわ」

セーラ、玄関ドアへ入る——

11	同・院長室

デスクに向って帳簿をつけているミンチン——

ソファのアメリアの膝で、なでられていたシーザーが、耳を立て、啼く――

ノックの音――

ドアが開き、封筒を手にしたセーラが入って来る――

ミンチン「(振向かず)お入り……」

セーラ「あの、院長先生にお手紙ですが」

ミンチン「(振向かず)アメリア、受取って」

アメリア「はい……」

シーザーが膝から飛び降り、セーラの傍へ――アメリアも、立ってセーラに近寄ると、封筒を受取る。

アメリア「ご苦労さま……」

セーラ、一礼して出て行く。急いで続こうとしてドアにぶつかるシーザー。

アメリア、封筒の差出人を確かめる。

アメリア「まあ、市長夫人からですわ」

ミンチン「なんですって」

　　驚いて振向く――

　　アメリア、急いで封筒を手渡す。

アメリア「きっと、お姉様がお願いしておいた、学院への援助の御返事ですわ」

ミンチン「わ、判ってます！」

　　ミンチン、あたふたと封を切ると、書状を取り出して読む――その表情が、見る間にうろたえる。

ミンチン「まあ…（思わず立つ）」

アメリア「どうしたんですの？」

ミンチン「今日の授業見学についてです…大変に期待していると…」

アメリア「まあ…では、援助の件も有望なんですのね」

ミンチン「慌てないで！…そのあとに、こう書いてあります！…（読む）以前、見学した折の、あの代表生徒さんの、

素晴らしいフランス語を、是非、見学の皆さんにも紹介したいと思っています…」

アメリア「まあ、市長夫人は、あの時のセーラさんを憶えていらっしゃるんですのね。なんて光栄なんでしょう」

ミンチン「アメリア!」

アメリア「え…」

ミンチン「なにが光栄です!…セーラはもう、この学院の代表生徒でもなんでもないのですよ!」

アメリア「そ、そうでしたわ…お姉様一体どうなさるおつもりで…」

焦々と歩き廻りはじめるミンチン——

ミンチン「なんという困った事に…あの子が辞めたなどといえば、市長夫人はガッカリされて、援助の件もむずかしくなるに決っています」

アメリア「で、では…本当の事をお話しては…?」

ふっと足をとめ、鋭く見返すミンチン。

ミンチン「本当の事を、ですって？」

アメリア「え、ええ…インドのお父様が、ダイヤモンド鉱山に手を出して、破産した事や、熱病で亡くなった事…それから、今は、この学院で、メイドの代り…」

ミンチン「お黙り!!」

その怒号に、アメリアは震え上り——仰天したシーザーは、駆けずり廻って、戸棚のてっぺんに飛び上り、ミンチンを見おろして敵意で唸りわめく。

ミンチン「セーラが今なにをしているか、市長夫人に知れてごらん。援助どころか、この学院の経営はメチャメチャです！」

ミンチン、額を押えて、椅子に坐り込む。

アメリア「お、お姉様…」

慌ててハンカチであおぐ

12

同・地下の作業場

バケツを抱えて戻って来るセーラ、ベッキーと食器洗いにかかる。

13

同・院長室の前

振鈴が鳴る――出て来るアメリア。

14

同・教室

教科書を閉じるデュファルジュ――

デュファルジュ「では、今日はここまで…　オ・ルボワール、マドモワゼル…」

女生徒たち「オ・ルボワール、ムシュウ、デュファルジュ…」

15 同・廊下

教室のドアが開き、出て来るデュファルジュ――

アメリアの声「デュファルジュ先生…！」

近づくアメリア――

デュファルジュ「やあ、アメリア先生、なにか、ご用ですかな」

アメリア「ええ、実は、お姉様が、是非ご相談したい事があると…」

デュファルジュ「ほう、院長先生が…」

16 同・院長室

ミンチンとアメリアの前に、来ているデュファルジュ――

デュファルジュ「ふうむ…市長夫人は、あのセーラ君のフランス

語を憶えておいででしたか…」

ミンチン「だから余計困っているのです。まさか、セーラを教室に出す訳には行きませんし…」

デュファルジュ「しかし、院長先生…残念ながら他の生徒さん方のフランス語の力では、とても市長夫人を感心させる程には参りませんぞ」

顔を見合せるミンチンとアメリア。

デュファルジュ「院長先生…いかがでしょうかな。この際、思い切ってセーラ君を」

ミンチン「なんですって」

デュファルジュ「代表生徒の代役になって貰っては？」

ミンチン「まあ…代役ですって？」

デュファルジュ「左様…あの子なら、今すぐにでも、立派にフランス語の力をお見せ出来る筈ですぞ」

茫然と顔を見合せるミンチンとアメリア

ミンチン「アメリア！…セーラを呼びなさい、今すぐにです！」
アメリア「は、はい、お姉様…」

17 同・台所

山のような鍋や食器を片付けているセーラとベッキー。
モリーとジェームスがあおり立てる。

モリー「さあさあ、今日は忙しいんだからね、早く仕事を片付けてくれなきゃ困るんだよ」
セーラ「はい、モリーさん」
ジェームス「セーラ、お前はそいつがすんだら市場に買出しだ。判ったな」
セーラ「はい、ジェームスさん…」
その時、入って来るアメリア。

アメリア「あ、セーラさん、院長先生がすぐに来るようにと」
セーラ「え…でも、これから、市場の買出しに…」
アメリア「そんな事、あとでいいんです。さ、早く」
セーラ「は、はい、アメリア先生…」

セーラ、アメリアに促されて出て行く。

唖然と顔を見合せるモリー、ジェームスと——ベッキー。

18 同・院長室

ミンチンの前に——アメリアに連れて来られたセーラ。

ミンチン「よろしいですね、セーラ…そういう訳で、今日は特別に、お前に、代表生徒の身代りを申しつける事にしました…」

19

同・教室

セーラ「（茫然）身代り…」

ミンチン「不服はない筈です…判りましたね」

セーラ「は、はい、院長先生」

一方のソファで、微笑でセーラに片眼をつぶってみせるデュファルジュ――

ミンチン「それから、アメリア…」

アメリア「はい、お姉様…」

ミンチン、セーラをみやりながら、

ミンチン「この服では、市長夫人はじめ偉い方々の前には出せません…生徒たちの誰かにいって、借りさせるように…」

アメリア「はい、お姉様…」

（中　C　M）

騒然とざわめく女生徒たち――
セーラを連れたアメリアが来ている。
アメリア「静かに！…静かにして下さい！」
女生徒たち、多少静まる――
アメリア「ラビニアさんに代って、セーラさんが代表生徒になるのは、市長夫人が見学にお見えになった時間だけです。よろしいですね、皆さん」
ざわめく女生徒たち――
ラビニアを挟んで囁くジェシーとガートルード。
ジェシー「ひどいわ、これじゃあなたの立場がないじゃないの」
ガートルード「そうよ、セーラを代役にするなんてあんまりだわ」
凝然とセーラをみつめているラビニア。
アメリア「では、ラビニアさん、判りましたね」
ラビニア、屈辱と怒りに、唇を噛みしめ、セーラをにらみつける。
アメリア「それから、皆さん…誰方か、セーラさんの為に服を貸

してあげて下さい。無論、見学の時間だけの事です。
お願いします…」
ざわめく女生徒たち――
アメリア「ラビニアさん…あなたは沢山お洋服をお持ちだし、背
も同じ位だから、如何かしら」
ラビニア「（立つ）折角ですけど、私、この頃大分大きくなって
るんです…やせて小さいセーラには、まるで似合わな
いと思いますわ」
じっと耐えるセーラ――
早速、ニヤリとラビニアに囁きかけるジェシーとガ
ートルード。
アメリア「困ったわねえ、誰か、いないかしら」
突然、ロッティが立上る。
ロッティ「セーラ・ママ…私の服着て…」
セーラ「ロッティ…」

どっと笑うジェシー、ガートルードたち。

ロッティ「なによ。私だってこの頃大きくなったんだもん、セーラ・ママに着られるかも知れないわ！」

また笑うジェシーたち——

アーメンガードが立つ

アーメンガード「あのォ…私の服でよかったら…」

ジェシー「ダメダメ！」

ガートルード「どうせダブダブ」

どっと笑う女生徒たち

セーラ「有難う、アーメンガード…喜んでお借りするわ」

アメリア「まあ、よかったこと…じゃ、早速拝借して、着換えてらっしゃい」

セーラ「はい、アメリア先生…」

20 同・二階の廊下

階段を駆け上って来るセーラとアーメンガード。

21 同・アーメンガードの部屋

入って来るアーメンガードとセーラ。
アーメンガード、自分の衣服抽出に行くと、底から服を取り出す。
アーメンガード「これ、私が一番好きだった服なの…ふとって着られなくなっちゃったけど」
セーラ「まあ…有難う、アーメンガード」

22 同・表

馬蹄の音と共に到着する三台程の豪華な箱馬車——
玄関から飛び出して来るミンチンとアメリア——降

り立つ市長夫人を迎える。
次々に降り立つシルクハットの評議員、視学官、市重役、慈善家の紳士たち。

23 同・一階廊下

地階から、掃除道具を手に上って来るベッキー、そっと一方を窺う。
突然、教室の方から、盛大な拍手がまき起る――

24 同・教室

教室の後方に――居並んだ市長夫人や見学の紳士たち。

× × ×

席につき、フランス語の教科書を拡げている女生徒たち——

ラビニアは、かっての席に——代って、アーメンガードの服を見違える程美しく着こなしたセーラが、ラビニアの代表生徒の席に坐っている。その手の教科書は、デュファルジュが渡したあの表紙の教科書である。

× × ×

教壇に、教科書を手にしたデュファルジュ——
離れて、ミンチンが緊張して見守っている——

デュファルジュ「では、セーラ君…次の〇〇の詩を朗読したまえ」
セーラ「はい……」

教科書を手に立上る——

デュファルジュ「いや、出来たら暗唱を……」
セーラ「はい……」

教科書を閉じると、静かに机の上に置く。——微かなざわめきが、ジェシー以下女生徒たちに伝わる。
皮肉な冷笑を見せるラビニア
セーラ、美しく暗唱しはじめる。
(詩原文、選択)

25 同・洗い場

洗い物を続けるベッキー、ふっと手をとめる。
ベッキー「お嬢様…どうか、うまく行きますように…」

26 同・教室

やがて、暗唱を終えるセーラ——坐る。
一斉に拍手する紳士たち——

市長夫人も、にこやかに頷き、拍手する。

ほっと安心するミンチン、市長夫人、紳士たちに得意気に会釈を返す――

ミンチン「オホン、申遅れましたが、私どもの学院では、フランスの詩の朗読には特に力を注いでいるのでございます…いかがでございましたか？」

市長夫人「とても立派でしたわ…発音といい、抑揚といい、まるでフランス人のようでございましたわ。ねえ、皆さん」

一斉に頷く紳士たち――

デュファルジュ、満足の微笑を浮べる。

その時、ノックの音――

ミンチン「はい…」

ドアが開き、アメリアが入って来る。

アメリア「お姉様、おもてなしのお支度が出来ましたが」

ミンチン「そお…（市長夫人たちに）では、どうぞ、あちらの方

へ…」

頷いて一同を促す市長夫人――

27 同・廊下

アメリアに続き、ミンチンと出て来る市長夫人たち

――

28 同・教室

セーラを取囲むロッティ、アーメンガードたち。

ロッティ「うまかったわ、フランス語…あたし、セーラ・ママが
先生になったらすごく嬉しいんだけどな」

アーメンガード「ほんと…セーラが先生になってくれたら、私だ
って少しはフランス語が出来るようになると思

うわ」

セーラ「そんな…無理よ。院長先生がそんな事をお許しになる筈がないわ」

ラビニアたちが微笑で近寄る。

ラビニア「当り前じゃない。セーラは一日だけ代表生徒の代りをやっただけよ、先生になんて、なる訳がないわ」

ガートルード「そうよ、今日が終れば、また台所のメイドよ」

ジェシー「(物マネ)セーラ、まごまごしてないで、しっかり掃除するんだよ」

ガートルード「(物マネ)は、はい、院長先生…」

どっと笑うラビニアたち――

セーラ、ロッティ、アーメンガードたち、じっと見返す。

29

同・一階食堂

テーブルで市長夫人たちをもてなすミンチン、アメリアー――ベッキーが茶を注いで廻る。

市長夫人「所で、院長先生…」
ミンチン「は、はい、なんでございましょう」
市長夫人「あれ程、フランス語のお上手な生徒さんが居られるのに、なにもせずにいては、この学院のマイナスではありませんこと？」
ミンチン「と、申しますと？」
市長夫人「例えば、年少の生徒さんに、フランス語の初歩を教えさせるとか…、セーラさんなら充分やれる筈と存じますわ…ねえ、デュファルジュ先生」
デュファルジュ「（微笑）その通りで…市長夫人…」
ミンチン「セ、セーラに、年少組を教えさせるようにと…」
市長夫人「ええ、学校経営にはそうした配慮こそ必要ではないかと存じますが…」

一斉に頷く紳士たち――
はっと見るベッキー。
ミンチン、冷汗を拭う――
ミンチン「気がつきませんでした…その点は、早速仰言ゃる通りいたす事に、はい…」
デュファルジュ、ニッコリ。
ベッキー、こみ上げる嬉しさを隠して一礼すると、そっと出て行く。

30 同・教室

飛び込んで来るベッキー。
ベッキー「お、お嬢様、大変でございます。市長夫人のおすすめで、お嬢様は年少組のフランス語の先生におなりになるんでございますよ」

セーラ「な、なんですって！」
ロッティ「うわあ、セーラ・ママが、私の先生になってくれるんだ」
アーメンガード「ね、セーラ、もしそうならロッティと同じ年少組に入れてね。だって私、フランス語ときたらまるで駄目なんだもの、あなたに教われるなら、こんな嬉しい事ないわ」
セーラ「まあ…」
一方で、ラビニアとジェシー、ガートルードが冷く顔を見合せる。
そこへアメリアが戻って来る。
アメリア「さ、皆さん、市長夫人をお見送りですよ」
女生徒たち「はあい」
セーラ

31 同・表

ミンチン、アメリア、女生徒たちに送られて出て来る市長夫人と紳士たち――

32

同・教室

ポツンと教科書類を片付けているセーラ――

ベッキーが入って来る。

ベッキー「お嬢様…院長先生がお呼びですけど…」

セーラ「えっ…」

33

同・院長室

セーラの前に――いらいらと歩き廻っているミンチン、ふと停るとセーラに向き直る。脇にアメリア。

ミンチン「いいですね、セーラ…お前に年少組のフランス語を教

えさせる事にしたのは、私の深い思いやりからです…

それを忘れないように」

セーラ「はい、院長先生…」

ミンチン「感謝の言葉をのべるべきです」

セーラ「はい、有難うございます、院長先生…」

ミンチン「それからもうひとつ…フランス語を教えるようになるからといって、お前の身分が変ったり、今までの仕事が減る訳ではありません」

アメリア「お姉様…」

ミンチン「台所の仕事は、今まで通り片付けるんです…さ、いつまでそんな服を着ているんです。早く元の服に着換えて働くんです！」

セーラ「は、はい、院長先生…」

34	同・表

使用人階段を――元の粗末な服に着換えたセーラが、

買出しの野菜籠を抱えて上って来る。

× × ×

丁度、玄関から、教科書を抱えたデュファルジュが

出て来る。

× × ×

セーラ「デュファルジュ先生…」

デュファルジュ、セーラの姿を見直して、両手を拡

げ、肩をすくめる。

デュファルジュ「おやおや、やっとうまく運んだと思ったら、ま

た逆戻りじゃな」

セーラ「あのオ…私に年少組のフランス語を教えさせるよう市長

夫人にすすめて下さったのは、先生だったんですね」

デュファルジュ「ノンノン…それはきっと神様の思召しじゃよ…

(片眼をつぶる)」

セーラ「まあ…」
デュファルジュ「さあ、買物なら、そこまで付合うかな」
セーラ「はい、デュファルジュ先生…」
セーラ、デュファルジュと歩き出す。

35 街の通り

デュファルジュと来るセーラ――
デュファルジュ「しかし、よく勉強しておいてくれたぞセーラ君…市長夫人も、君に年少組を教えさせるように切出せた訳じゃからね」
セーラ「先生のお蔭ですわ…私、あの教科書を何度も何度も読んだので、自然に憶えてしまったんです」
デュファルジュ、微笑で頷く――
デュファルジュ「所で、君は将来なにになろうと考えているんだ

ね」

セーラ「先生です…」

デュファルジュ「先生…」

セーラ「ええ…お父様が亡くなって、将来の事を真剣に考えるようになって、そう決心していたんです…ですから、年少組を教えさせて頂けると決って、とても嬉しいんです」

デュファルジュ「成程、それはよかった…」

明るく笑うデュファルジュ——

36

ミンチン女学院・屋根裏部屋（夜）

机上に、ローソクの灯——

セーラが熱心に、フランス語の予習をしている——

×　　×　　×

壁穴から出て来て、キョトンと見上げるメルと一族——

×　×　×

セーラ、気づいて机上のパンクズを投げてやる――

セーラの心「明日からロッティたちにフランス語を教えられる…今、私の心は新しい勇気と熱意であふれそうになっていました…」

（おわり）